

中学校社会科公民的分野における PBL を活用した授業づくり

「暗記する社会科」から「考える社会科」への転換を目指して

松山 大輝

本稿の目的は、中学校社会科公民的分野における PBL を活用した授業づくりについて検討することである。その際、シミュレーションゲーム教材を用いて、「暗記する社会科」から脱し「考える社会科」を目指す授業に着目する。

社会科が「暗記教科」と思われてしまう要因として、①膨大な個別知識を子どもが効率良く理解できるような授業づくりが求められている点、②評価の規準が①のような授業で理解した知識を単に回答できているかに終始してしまいがちな点、③今日の子どもにとって「切実な問題」が極めて少なく、学習主題の理解を深めることや、それに関する思考力・判断力などの育成に結び付かない授業を展開してしまう点の 3 つが挙げられている。そこで本稿では、「考える社会科」の授業のあり方について PBL をもとに論じる。

PBL には、Problem-based learning と Project-based learning の 2 種類がある。前者は問題を解決するという能動的な学習を通して、学習者が新たな知識の獲得や既習知識と結び付けることを促す学習方法であり、後者は実社会における本質的な問題について学習者間や、教員を含めた様々な他者と協働しながら知識を構築し、問題解決を目指す学習方法である。両者に共通するのは、学習者主体・協働的学習・社会課題の取り扱いの 3 点である。本稿では、PBL を「社会課題に対して当事者意識を持ち、その解決を目指すために、多様な他者と協働しながら既習知識を整理したり、新たな知識を獲得したり、知識を構造化したりすることを通して、学習者が社会課題の解決策を提唱する学習方法」と再定義する。また、複雑な現実世界の構造を単純化し、学習者が擬似的に社会課題を経験することで、問題解決に向けた思考・判断を促すことができる点でシミュレーションゲーム教材は PBL と親和性が高いと考える。

子どもが多様な他者との協働を通して擬似的に社会の仕組みを理解し、主体的に当事者意

識を持って問いに向き合い、実際に社会課題を解決するために何が必要か考えられるような授業づくりが PBL を活用した社会科に求められていると考えられる。そのため本稿では、そうした授業づくりの要件として、①単元全体をどのように構想するか、②授業をどのように展開し、その際にどのような授業形態で行うか、③授業内でどのような発問や働きかけを教員が行うかについての 3 点について明らかにすることを目標とし、20XX 年に私立 A 中学校の 3 年生 55 名を対象に行われた PBL を活用した中学校社会科公民的分野の授業実践を取り上げる。

本実践の結果から、本稿の目標について以下の点を見出すことができる。1 つ目に、生徒が身体を動かしながら身近な課題に基づいて考えを深める活動を単元冒頭に位置付け、そこで得た経験を起点として新たな知識の習得へと繋げられるように単元を構想する点である。2 つ目に、上記の活動の時間において①活動中での成功・失敗体験をもとに既習の概念を再構築したり深めたりする振り返りの時間を授業の中盤に十分に設ける点、②1 時間の授業の中で上記の活動と振り返りを繰り返す点の 2 点である。加えて、クラスの垣根を超えて授業を実施することで、新たな価値観に触れることができるような授業形態にするという点も見出すことができる。3 つ目に、①生徒の経験をもとに学習目標に関連付けた下位目標を教員が提示する点、②下位目標と生徒の経験とを結び付け、他者との協働の重要性やその方法について考えるように教員が声かけを行う点、③働きかけによって結果的に、生徒が下位目標を達成することを通して、学習目標を自ずと達成することができるように教員が発問を工夫する点という 3 点である。

したがって、生徒が社会課題を擬似的に経験し、経験と知識とを教員の働きかけによって組み合わせることで、問いに対して当事者意識を持ち、その解決策を多様な他者との協働を伴いながら模索する PBL を取り入れた中学校社会科公民的分野の授業を展開することで、「暗記する社会科」から「考える社会科」へと転換することができるようになると考えられる。

しかしながら、PBL を取り入れた中学校社会科公民的分野の授業のあり方には、議論の余地が残されている。例えば、本稿で取り上げた実践は教室の中で完結するものであり、生徒は擬似的に社会課題を経験したに過ぎず、教室の外にある実際の社会課題を経験しなければ、真の意味で問題に気づくことはできない恐れがある。また、社会科は地理的分野・歴史的分野の基礎の上に公民的分野を展開する構造をとっているため、生徒が前学年までに地理歴史で学んだ知識を公民で活用できるような連続性を持ったカリキュラムにすることが望ましい。生徒が教室の外に出て社会の中に散在する問題に気づき、多様な他者と協力しながら既習知識を活用し、その解決を目指すことができる市民となることのできるような授業づくりが、今後の課題である。